# 人間と AI の「正しい」活用のために

香川県立高松高等学校 1 年　松野　真穂

## はじめに

いまや AI はめざましい発展を遂げ、私たちの生活は AI なくしては成り立たなくなっている。例を挙げるとスマートフォンの顔認証、学習状況の管理、無人決済、自動運転など枚挙に暇がない。

私たちは AI とうまく付き合っていくことが求められているが、AI とはどんなもので、私たちはどのように活用すべきか漠然としたイメージしかない人が多いのではないのだろうか。

## AI の発展と人々のイメージ

そもそも AI とはどのように発展してきたのだろうか。

私たちは今 AI 技術が比較的に向上した第三次 AI ブームの中で生きているが、1950 年頃に第一次 AI ブームが始まって以降約 70 年に渡り AI は進化を遂げ人々の注目の的となっていることが分かる。

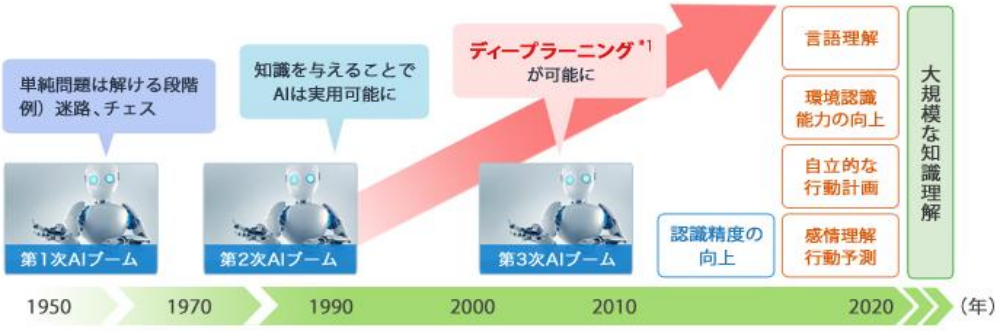


図 1　AI 発達の歴史（総務省「平成 28 年度版 情報通信白書」を基に au カブコム証券作成）

このように発展を遂げてきた AI だが、私たちは AI に対してどのようなイメージを持っているのだろうか。図 2 によるとポジティブなイメージを持っている人が多い結果だとわかるが「何となくこわい」に「あてはまる」、「やや当てはまる」と答えた人は合計 51.8%であるとわかる。この結果から言いたいのは AI についてよく理解していないにもかかわらず怖いと感じている人が多いことだ。私たちは AI についてよくわかっていないのに「AI は人間にとって脅威である」などと恐れを抱いている。私たちが AI をうまく活用していくには AI のメリットとデメリットについて「正しい」知識を蓄え、「正しく」利用し、時には「正

しく」怖がることが必要ではないだろうか。

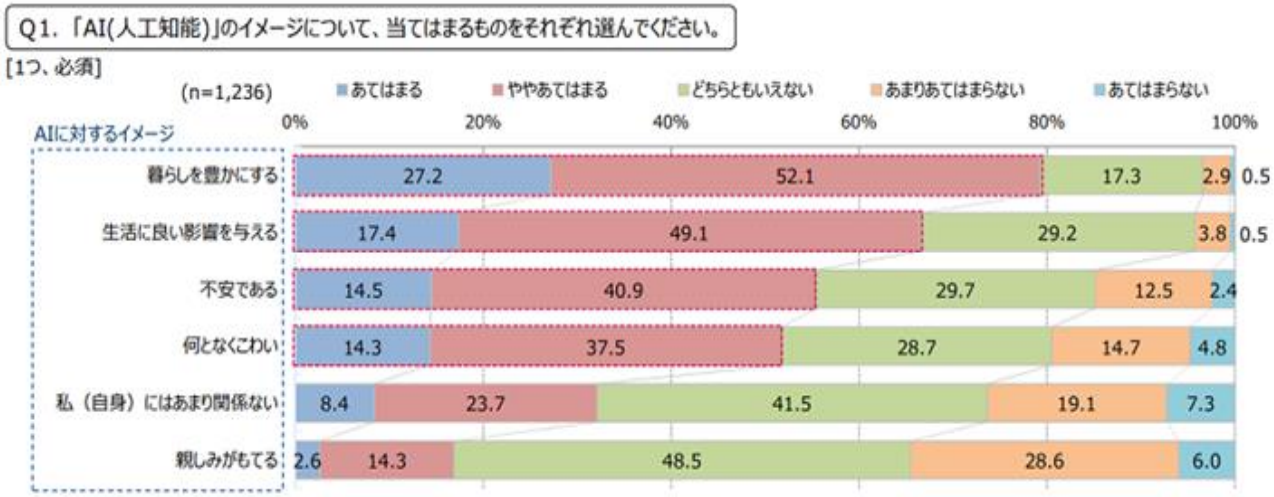


図 2　消費者庁「第１回消費者意識調査結果（AI に対するイメージについて）」より

## AI の悪用に騙されないために

AI は私たちの生活を豊かにする一方で使いやすいが故のフェイクニュースや不正、トラブルが相次いでいる。ここではロシアとウクライナの抗争で AI を悪用したゼレンスキー大統領の偽動画が SNS で拡散されたことを例に挙げたい。

その動画の内容というのはゼレンスキー大統領が国民に降伏を呼びかける、というものであった。この動画で大統領は

*‘最初私はドンバスを取り戻すことを決めたが、取り戻すことができなかった。だんだんひどくなってきました。あなたたちに「さよなら」を言いたい。武器を捨てて家族の元へ戻ってください。この戦争で死ぬ意味がない‘*

とまで言っているが、この音声と画像というのが本物そっくりでフェイクかどうか全く判断がつかないレベルなのである。偽動画だと分かった上で見ると不自然な点に気づくが、日常生活で送られてきた際に、果たして私たちは正しい判断ができるだろうか。

図 3　FNN プライムオンライン（2022.3.18）より

もし、技術が進み、これよりも精巧に作られたものが出回ってしまったら深刻な問題となるだろう。私たちはAIによる悪用にいったいどう向き合っていくべきだろうか。

一つ目に、「クロスチェック」の重要性があげられる。たったひとつの情報だけでは正しいものか判断することができない。ほかの情報と比較してみることで冷静な判断をすることが大切である。

二つ目に、AIの情報を安易に信用しないことである。AIは人間より優れている、いつも正しい、という思い込みによって私たちはAI悪用の罠にはまってしまう。AIが絡んだ情報ではまずその情報を疑う、そして自分でその情報について深く調べる、という臨機応変に対応する能力が求められる。

**学習面におけるAIの活用**

現在ChatGPTをはじめとするAIが教育現場で数多く利用されている。実際に高校でもコンピュータによる自動採点が行われたり、個人のレベルに合わせた学習カリキュラムが作成されたりなど、より質の高い教育を実現することにAIは非常に貢献している。また教員の負担も軽減できるなど効率的な学習の為にAIの存在は必要不可欠なのだ。

しかし一方で、学生が学校のレポートや作文を書くためにAIを利用することも少なくないのだそうだ。私はChatGPTの作文がどのようなものか調査するために、「〇〇の本の感想文を書いて」と指示してみた。すると瞬時に内容に沿った感想文が作成された。この機能が多用されてしまえば、学生は自ら考えて文章を書かなくなってしまい、思考力の育成を阻害してしまうことにつながってしまうのではないだろうか。実際に国内の大学では、「利用の禁止、制限」というメッセージを発信している大学もある。例えば、上智大学は「リポートや学位論文でChatGPTなどのAIが生成した文章や計算結果などを、教員の許可なく使うことを禁止」とし、それに加えて「使用が判明した場合、厳格な対応を行う」というネガティブな告知を行っている。

図 4　AI の対話型ソフトを巡る大学の対応(西日本新聞より)

生成 AI は私たちが思いつかないような発想をしてくれるため全てにおいて AI に従ってしまいそうになるが、それでは私たちにとって何の利益ももたらさない。そもそも AI は人間が情報を学習させることによって発展していくのだから、人間が分からない情報を AI が理解しているはずがないのだ。このことから私たちは AI を「参考書」として扱う心構えが必要である。つまり AI を解けない問題を解く公式が載っている本として扱うことが大切なのだ。

本来学習とは単に暗記することでなく情報を周囲に応用させる思考力を養うことである。AI にすべてを委ねてしまうことは思考力向上の機会を完全に失うことでもある。私は、AI には依存しないという強い意識と、あくまで私たちの考えの「参考」程度に過ぎないと理解して活用していく努力が必要だと思う。

**AI と人間が共存するには**

AI と人間が対等な立場で生活していくための活用法として、人間と AI それぞれの得意分野でお互いの弱点を補うことがあげられるだろう。例えば研究分野。AI が実験のプロセスを立てる。しかし AI はどうしてその結果に至ったか経緯を説明できない（というか理解できない)。そこで人間の能力の出番である。そのプロセスに至った経緯を推測し、より良いものに改善していく。こうした AI と人間の助け合いによって私たちの生活をより良いものへと導いていくのではないだろうか。

**おわりに**

現代の私たちは AI に対して期待する心情もありながら、将来に対する不安も抱かずにはいられない。AI は正しく使うか否かで特効薬にもなり、毒にもなりうる。そんなつかみどころのない AI とうまくつきあっていく為にできることは、AI の情報に依存しないことである。私たちは AI に「利用される」側ではなく、「利用する側」なのである。AI は我々人間の教育なくして発展することなど不可能なのだから。

今回私は AI について調べていくにつれて、私たちは AI のメリットやデメリットについて今まで全く知らないで利用してきたのだと改めて痛感した。AI に対する知識なしに、「正しく」利用し、共存していく社会を実現することなどはっきり言って夢のまた夢なのではないだろうか。次の世代を担う私たち。AI という優れたものが発達しているのだからこれらの情報を取捨選択する能力を身につけ未来をより良いものにする責任が私たちにはある。そのために私は AI をどう活用できるか、この活用法は本当に有害ではないのかなど、その場その場で慎重に考え、自問していきたいと思う。

AI に対する人々の正しい理解の積み重ねがいつしかより良い生活の実現につながると願いながら。

【参考資料】

・総務省「平成 28 年度版 情報通信白書」
https://www.soumu.go.jp/johotsusintokei/whitepaper/ja/h28/html/nc142120.html

・消費者庁「第１回消費者意識調査結果（AI に対するイメージについて)」
aa.go.jp/policies/policy/consumer_policy/meeting_materials/assets/consumer_policy_cms101_20316_03.pdf

・「ディープフェイク悪用“ゼレンスキー大統領”が国民に降伏呼びかけるニセ動画 見分ける自信ありますか？」FNN プライムオンライン（2022.3.18)
https://www.fnn.jp/articles/-/333829

・AI の対話型ソフトを巡る大学の対応(西日本新聞)
https://www.nishinippon.co.jp/item/o/1078879/